

『溺れる淫情 -孤高なセレブの執愛-』

著：高月紅葉

ill：石田恵美

「あいたたた」

二日前に負った打ち身のケガをすっかり忘れていた。カウチソファに転がった栞島は、尾を引くような痛みをやり過ごす。ひと息をつくと、額のほうから影が差した。

「おはよう。食事にしようか」

起き抜けに見る美形はインパクトがある。逆さまでもパーツの並びに狂いがなかった。男の口調はそっけないが、声に甘い響きがあるせいで優しく聞こえる。いかにも女泣かせな上品さだ。

カウチソファの背にすがるようにして起きあがった栞島は、男の後ろ姿を目で追った。

長身にたくましい腰まわり、頭部は小さく肩幅がある。

身のこなしはしなやかで、動作と動作を繋ぐ『間』が優雅だ。まるで踊るようにしなやかで、見ていて飽きない。

男が消えたのは、リビングとひと続きになっているダイニングの右手側、チラリと見えるキッチンだ。なにやら作業をしている。トレイを手に戻ってきたが、ぼんやり眺める栞島とは視線を合わせなかった。

「そこで食べるかい。それとも、テラスへ？」

「……え？ あ、ああ……じゃあ、テラス」

答えながらも栞島には現状が理解できなかった。あまりに深く寝入ったので、昨日のことさえもはっきり思い出せない。

のろのろとカウチソファを離れ、身体に負担をかけないように、今度はゆっくりと腰を伸ばした。腕も前方へ突き出す。袖が引きあがり、手首にはめた高級時計が鈍く光った。

「……かしわざい」

名前が頭に浮かび、すべてが繋がる。雨の記憶がよみがえり、車の前へ飛び込んだことも思い出す。その車の持ち主がいまの男だ。

寝乱れた金茶色の髪を掻きまわし、栞島は視線を巡らせる。煙草を探したが、部屋にそれらしきものは見当たらない。

「なあ、煙草ってないの？ 吸わない人？」

袖を肘まで上げながらテラスを覗く。視界がぱっと明るくなり、あざやかな海の色が目飛び込んできた。

栞島は思わず歓喜した。叫んで飛びあがり、裸足のままでテラスへ出る。

海沿いの一等地に建っているコンドミニウムだ。目の前はビーチだが、テラスの柵越しには青

くきらめく海原の景色が広がっていた。

遠方に富士山がかすみ、横たわる岬の緑が視界の端を彩る。眩しいほど澄んだ青に波頭の白が散らばり、その合間を縫って走るのは、ウインドサーフィンのセールだ。さらに奥で、ディンギーが波を切る。

太陽はすでに頭上にあっただ。

「細巻きの葉巻でよければ……。アルコールと一緒にないと、吸わないんだ」

ラウンドテーブルのイスに座った柏木は、真っ白なシャツを腕まくりにして、丸首のニットベストを着ている。着こなしの難しい組み合わせだが、上品な彼にはよく似合う。ノーブルな雰囲気は際立ち、栞島もしばらく目を奪われた。

「葉巻かよ……。メシのあとでいいや」

いかにもセレブな返答にげんなりした態度で、食事がセットされた席へつく。柏木は隣に座っているが、それぞれのイスは離してある。丸テーブルを四等分した隣り合わせの二点だ。前を向いても視線はぶつからない。

コバルトブルーのマットが敷かれ、具たくさんなトマトシチューにサラダが並ぶ。テーブルの中央付近には、布のかかった小さなカゴが置かれ、端から覗いているのは切り分けたバケットだ。

よほど手慣れたメイドを雇っているのだろう。簡素だが趣味のいいテーブルセットだ。住み込みではなく、食事の時間に合わせて出勤するタイプだろうと考えながら、栞島は涼しげなグラスに手を伸ばした。

搾ったライムとミントが瑞々しく、炭酸水の泡がクラッシュアイスにまぎれている。くちびるを近づけると、爽やかな柑橘の香りが漂った。

自然と呼吸が深くなり、頭の芯がすっきりとする。喉を潤し、大きく息を吐き出した。

「ビーチサイドで悠々自適な隠居暮らし。金があるってのは、ほんと、水と空気があり余ってるって感じだよな」

褪せたブリーチの髪を揺らした栞島の言葉に、サラダを口に運んでいた柏木の眉が動いた。

「洒落たことを言うね」

さらりとした口調に本心は見えない。穏やかな声だが、顔は笑っていなかった。

栞島のような根無し草に対する侮蔑がわずかに見え、それがかえって安心を呼ぶ。

「あんた、友達に会社を乗っ取られて、金だけは手元に残ったんだろ？ 株を売ったんだっけ。まあ、遊んで暮らせるならいいじゃん」

軽口を叩きながらシチューを飲む。口に入れた瞬間から目を見開くほどに美味しい。栞島は思わず腰を浮かした。

「なに、これ！ めっちゃウマなんだけど……。すっげーッ！ あんたのメイドはプロ並みだよ。ってか……。シェフの味だよな、これ」

「住み込みのメイドはいないよ」

「だろうな。このクラスのコンドミニアムなら通いだもんな」

メイドの部屋が用意できる邸宅以外での住み込みは難しい。柏木のコンドミニアムはマンションタイプで、部屋は最上階の三階に位置している。

カリッと焼いたバゲットをちぎる柏木が手を止め、拝島の顔をまじまじと眺めた。

「ジゴロが顔にケガをするなんて……。よっぼどのことをしたんだな」

「こっちの都合なんて考えちゃいないんだよ、あいつらは。……顔は、一週間もすれば治る。その頃までいさせてよ。洗車とワックス掛けなら得意だ。あの車、ぴっかぴかに磨いてやるからさ。……あとは、俺でも出入りできそうな、パーティの情報をちょうだい。軽いノリのやつね。ディスコとかクラブとか」

「それなら、横須賀あたりまで出ればいい」

「顔見知りが多いからムリ。すぐにあぶり出されて、ボコられる」

その点、上質セレブのコミュニティなら安心だ。

「だとしたら、まずは身なりを整えることだな」

「傷なら、すぐに治るって言っただろ」

胸をそらして自信満々に答える。柏木が、ほんの少しだけ表情を歪めた。

「……髪の色のことだよ」

パンを置き、ライムソーダでくちびるを潤す。引き締まって精悍な顔立ちに憂いの影が差し込んだ。

「以前に見かけたときにもうんざりしたんだが、その色はあまりにひどい。色でもないな。ブリーチをしたきりだろう」

「前は染めてたんだよ。色が落ちただけ。別に普通だろ」

「そんな格好の男を相手にする女なんて、たかが知れているじゃないか」

「マダム・イツコのエスコートのときも、このまんまだったけど？」

むっとして言い返すと、鼻先で笑われた。

「あの人は別格だ」

それは、その通りだ。拝島もわかっている。

マダム・イツコの貫禄や品性は、男によって盛り立てられるものではない。連れてくる若造までランクアップさせる、彼女自身の能力と実力に基づいた存在感だ。

「マダムはもうきみのことを覚えていなかったよ」

柏木の言葉は、嫌味にも慰めにも聞こえた。拝島は黙り、海を眺める。

テラスに張り巡らされた柵のあいだを、ディンギーがすーっと走り抜ける。

ふいに海風が吹いて、舞いあがりそうなテーブルマットを柏木が押さえた。その手首に腕時計は見えない。頬杖をついた拝島は、自分の手首に巻きついた腕時計のことを考える。

信頼していた友人に裏切られた柏木が、わざわざ手元に残していた時計だ。

地位を失い、評判を落とし、金だけを持って逃げたと揶揄された柏木礼司は、いまや『海辺の社交界の花形』と呼ばれるまでに返り咲いた。マダムのコネクションを引き継ぐのは彼だと噂が飛び交う。しかし、まだまだ先の話だ。

柏木は二十代後半の若輩で、都会から逃げ出した傷心の最中にある。過ぎゆく日々を無為に過ごし、パーティシーンに現れてはワンナイト・アバンチュールの相手をピックアップしていく。だれにも本気にならず、同じ女を続けて誘わない柏木だからこそ、女たちは安心して情を求める。唯一無二と選ばれることがない代わりに、捨てられることもない関係だ。

一種の禁忌を求める女たちにとって、柏木の存在は特に美しく見えるのだろう。

成熟した大人だけが愉しむことのできる情交は、無責任な自慰行為の延長にある。それは柏木にとっても、女たちにとっても。

栞島には皮膚感覚で理解できた。ジゴロの勘だ。

温和そうな顔立ちに浮かべるドライな表情と、澄んだ瞳の奥に隠されている荒れた雰囲気。いくらノーブルな佇まいで微笑んだとしても、拭いきれない厭世の淀みがある。柏木は、震えがくるほど不幸な男だ。

育ちがよくても、金を持っていても、人の心には平等に傷がつく。そして、落ちるところまで落ちて、うずくまるように朽ちていく。その過程の只中にいるから、柏木は刹那的に美しい。

退廃を味わい尽くしてきた栞島は、同類の匂いを嗅ぎつけてひっそりと微笑んだ。

「じゃあさ、あんたが好きなようにすれば？」

しばらくの沈黙のあとで、流し目を送る。

「髪もいいように染めて、それなりの服を見繕ってくれよ。それで相手が見つかるんだろ？」

挑むようにあくどい表情を向けたが、柏木はにこりともせず海を眺め続ける。

やはり柏木は不幸の中にいる。心はすでに死んだも同然の静けさだ。

心の中に広がる空虚を想像した栞島は、沸き立つような興奮を覚えた。知らず知らずのうちに笑みが浮かぶ。

ライムの香りが風に乗る、ふたりのあいだに渦を巻く。波音が寄せては遠のき、磯に遊ぶ鳥たちの声が繰り返される。

太陽光の明るさも、爽やかな空の色も、どこかもの悲しい。しらじらしさを感じた栞島は、また満足して微笑む。

視界の端に入る柏木は無表情だ。黒髪を海風に任せ、いっそう麗しく荒み、乾いていた。

\* \* \*

「何日ほどで仕上がるだろうか」

優雅に足を組む柏木が、ソファの肘掛けにもたれてたずねる。

「腰まわりを詰めて袖をお出ししますので、明日となると大変ですが、ご希望でございましたら、その通りに」

濃紺のダブルブレストスーツを着た中年の男が、抱え持つクリップボードから顔を上げた。

「もー、疲れた。休憩したいんですけどおー」

両手を腰に当てた栞島は、三面鏡の前でポーズを取りながらため息をつく。もう何度目になる

だろうか。あれを着ろ、これを着ると柏木に指図されて従ったが限界は近い。

銀座のヘアサロンでカットとカラリングとトリートメントのフルコースを施術されたばかりだ。グレイジュの染め色をじっくり確認する時間も与えられず、近くにある老舗百貨店へ連行された。

移動手段のSUVは、拝島の血と泥で汚れたクーペを手放したことでセカンドカーから格上げとなった輸入車だ。

「データは揃いました。もうじゅうぶんでございます」

クリップボードを持った中年の従業員がうやうやしく頭を垂れる。

車寄せそばのエレベーターで直通の最上階にある特別室は、ワインレッドの絨毯が敷かれた廊下を進み、曇りひとつないオーク材の扉を押し開けた先だ。

組み木細工の床に、飴色の腰壁。クロスはシックなボタニカル柄で、柏木が座っていたソファはペルシャ絨毯の上に置かれている。

肘掛けの木工細工が美しい曲線を描き、よく磨かれていた。

自然光がレース越しに降り注ぐ大きな窓のそばに、スーツのジャケットを着せたトルソーが並び、その前方のテーブルにはさまざまな洋服が用意されている。

色とりどりのシャツ、スラックス、薄手のセーターにカットソー。ネクタイも靴も揃えられ、どれもが男物だ。

「これに着替えるといい」

テーブルを見渡していた柏木が薄手のセーターとパンツを選び、若い従業員が素早く近づいて受け取った。拝島の腕や足の長さを測ったメジャーが首に垂れている。

「おつかれさまでございました。軽食をご用意いたします」

控えていた中年の従業員は、顔半分に大仰な擦り傷をつけた拝島にも礼儀正しい。

飲み物の好みを確認された拝島は『アイスコーヒー』と答えてからジャケットを脱ぐ。若い従業員の差し出してきた服と交換して、その場で着替えた。

試着スペースはパーティションの裏にあったが、あまりに次から次へと試着を指示されるので、途中からいちいち引っ込むのが面倒になってしまったのだ。

「パナマ帽にサングラスがあればカンペキ」

着替えた拝島は鏡の前で気取ったポーズを取り、右へ左へと身体をよじる。

柏木が選んだセーターはペールイエローのドルマンスリーブで、袖を通すまでもなく、手触りだけで価格が知れそうな代物だ。こまやかなゲージの生地に独特の光沢ととろみがあって、素肌への馴染みもいい。合わせた紺色のパンツはくるぶし丈で、リゾート地の若者としては洒落た風情になる。

ソファに戻った柏木のそばへ近づき、拝島はわざとらしく寄り添って座る。優雅に組んだ膝の上へ両足を投げ出した。

メジャーを首から掛けた若い従業員が、ぎょっとしたように目を見開く。足を乗せただけでなく、もたれかかった拝島の指が、柏木のジャケットの胸元へ忍び込んだからだ。

「やめないか。彼が誤解するだろう。ただでさえ、他人を伴ったのは、今日が初めてなんだ」

柏木は含み笑いを浮かべて言い、投げ出された栞島の足先から革靴を剥いだ。

「これも持って帰るよ。あと、さっきのローファーも。この服にはデッキシューズがいいな。そう、そのベージュとブラウンの……」

革靴を引き取った従業員が指示に従い、ツートンカラーのデッキシューズを持ってくる。ソファの背もたれに掴まった栞島が見つめると、従業員は顔を真っ赤にしてお辞儀をした。脱兎のごとき勢いで部屋を出ていく。

「やめろって、言っただろう」

柏木はあきれ顔だ。しかし、デッキシューズを履かせても、栞島の足を膝からおろそうとしない。

「あの店員さん、俺に気があるんじゃないの？」

「卑猥なものを見せられて迷惑しただけだ。当然の反応だろう。……そんなところに色気を振りまいてどうするんだ。きみが取り入るべきなのは『金のある女性』だ。これだけのことをしているんだからね、見事なお手並みで楽しませて欲しいものだよ」

吐息まじりの言い分に、栞島はもっともだとうなずいた。髪を染め、衣服を整え、栞島の印象はぐっとよくなった。顔の傷さえ消えてしまえば、勝負を賭けるのに不足はない。

「そっちだって、楽しんでるように見えたけどなあ」

柏木にそんなつもりがないことは百も承知で、言いがかりをつける。見上げた顔立ちは精悍で、丹念に彫られた彫刻のように整っていた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>